|  |  |
| --- | --- |
|  | No.42　　2011．8．5銀山中学校神　　貴　夫 |

被害者を分断！原発賠償中間指針

～　自主避難者を賠償対象から外す犯罪行為　～

原発賠償の中間指針が出されたとのニュースが流れた。これで生活の目処が立つ人もいる中で、「見捨てられた」と感じる被災者も多く出るにちがいない。子どもや家族の将来を心配し、自主避難をした人々を中間指針では切り捨てたのだ。これは国家による犯罪的な愚策だ。観光業などへの賠償が広範囲にわたって認められる中にあって、チェルノブイリ原発事故の避難区域・放射線管理区域に相当する線量地域から家族を守るために自主的に脱出した人々を賠償から外すなどということを許してはならない。自己責任社会が生み出した最大の愚策というほかない。

～　以下、ニュースより概要　～

**原発賠償の中間指針　原発賠償の中間指針まとまる**　　　8月5日 17時9分 NHK

東京電力福島第一原子力発電所の事故の損害について、賠償を認める対象や範囲を示す中間指針がまとまりました。～中略～　事故からおよそ５か月、被害者の救済が本格的に始まることになります。

中間指針は、～中略～　原発事故の被害者を迅速に救済するため、明らかに事故の影響と認められる損害について賠償の対象や範囲を示すもの～中略～　。５日にまとまった中間指針では、風評被害などの対象となる損害や地域が拡大されています。それによりますと、

【風評被害】

* 放射性物質を含む稲わらが畜産農家に流通していた１７の道県の牛が認められる。
* 国の暫定基準値を超える放射性物質が検出された静岡や神奈川など８つ県のお茶が対象となる。

【観光業】

* 国内の観光客について、すでに認められていた福島に加えて、茨城、栃木、群馬に拠点を持つ業者も、原発事故のあとのキャンセルなどの損害が認められる。
* 外国人観光客の減少については全国すべての地域が対象。ことし５月までの通常の解約率を上回った分の損害が認められる。

【輸出関連】

* 輸出についての風評被害では、原発事故のあと外国政府に輸入を拒否されたり規制されたりした時点で、すでに輸出や製造されていたものが対象となる。

○**一方、避難区域以外で自主的に避難した人の損害賠償については、指針には盛り込まれず**、改めて議論することになりました。～中略～　事故からおよそ５か月、賠償金の支払いを国が支援する支援機構法が成立し、中間指針もまとまったことから、今後、被害者の救済が本格的に始まることになります。

　「あらためて議論」とはどうゆうことか？　まずは自主避難を含めた避難者全体を賠償対象とすることを明確にし、具体的な算定基準について改めて議論するというのであればまだ理解できる。しかし、文面からはそうしたニュアンスは読み取れない。これは世論の動向を見るための一つの観測気球とみるべきだ。本音では賠償対象を絞り込みたいが政治不信が増大する状況になれば一定の妥協案を出すつもりなのだろう。何たる姑息な手段か・・・・。

徹底的に汚染度を測定し、詳細な汚染マップを明示した上で、最低でも欧州放射線リスク委員会（ECRR）の基準にそった賠償の骨格を示すべきだ。

　このままでは、自主避難を決めた被災者は経済的に追いつめられることになる。「20mSv問題」と同様に世論を大きく動かす必要がある。政府はその動向を見ながら最終報告をまとめていくことになるだろう。くだらない放射能劇場国会で、レベルの低い「男泣き」をしている暇があったら被災者の前でこれまでの原子力政策を懺悔し、原子力からの全面的撤退と被災者への補償を約束してから「男泣き」するのが筋とうものだ。泣きたいのは被災者の方だ。

　「風評被害」という台詞をこうした場面で持ち出すことも危険だ。食品の放射能汚染基準値を世界基準より大幅に引き上げておいて、それ以下は「安全」としているが、内部被曝問題が「風評」の中に括られていく危険を感じる。原爆症認定裁判訴訟では、晩発性の健康障害が認定対象から外されてきた歴史を持つ。測定値が全てではないが国が信用ならない以上、来るべき時に備えて被曝レベルを徹底的に記録することが今は重要だと感じる。

新たな運動へ向けての「ヒロシマ・ナガサキの日」を！

～　被曝者組織団体が「脱原発」を宣言したことの意味について　～

　今年も、8月6日・9日の「ヒロシマ・ナガサキの日」がやってくる。日本は世界に例のない都市部への原爆投下という残虐極まりない人類の悲劇の歴史を持つ国だ。それが故に非核三原則をかかげ、曲がりなりにも平和国家を目指してきた。しかし、その内実はアメリカの対日政策に翻弄され「非核三原則」自体がヤラセであったことが判明した。国民を欺いた佐藤栄作はノーベル平和賞を辞退もしくは取り消されるべきであり、放置していることは日本の恥じであると思うが、日本人特有の曖昧さ、従順さが今だにこれを許している。今日の状況を招いたマスコミの責任は重い。

さて、日本における原子力発電導入はアメリカが主導したものである。1954年3月1日、ビキニ環礁での水爆実験によって第五福竜丸が被曝し、船員の多くが放射能障害でなくなる事件が起きた。これを契機として反核運動が全国的に盛り上がり、労働運動もそこに大結集した。翌年8月には、「第一回原水爆禁止世界大会」が開催された。

アメリカは日本における反核運動の拡大がやがて共産主義への傾倒に進展することを恐れていた。一方で、自国の財政を大きく圧迫しつつあった核開発技術に対する議会の追及も課題となっていた。アメリカが抱える二つの課題を一挙に解決する方策として、日本に原発導入を画策したのである。CIAが読売新聞創始者、正力松太郎に秘密裏に接触。本来は核爆弾の原料生産のためにつくられた原子炉に「平和利用」という衣を着せて、夢のエネルギーとして大々的に日本でキャンペーンを展開した。正力松太郎は自社で起こった読売争議の経験の中で労働運動を憎々しく思っていたこともあり、アメリカと完全に思惑は一致した関係にあった。以来、読売や日本テレビを中心とするメディアは一貫して親米路線と原子力キャンペーンを展開してきたのである。

「第一回原水爆禁止世界大会」に結集した反核運動は、アメリカによる切り崩しとソビエト・中国の核実験の是非などをめぐり路線対立が深刻となり、分裂していくことになる。当時の自民党・民社党は運動から離脱し、日本社会党系、日本共産党系はそれぞれ別団体を組織することになる。大雑把に括ると

**原水爆禁止日本協議会　　⇒　共産党系　⇒　部分的核実験容認　⇒　原子力平和利用推進**

**原水爆禁止日本国民会議　⇒　社会党系　⇒　核実験全面停止　　⇒　原子力推進反対**

　東西冷戦構造と日米安全保障条約の政治的な思惑の中で、平和を願う運動組織体は分裂・弱体化の運命をたどることになる。また、原爆被爆者唯一の全国組織としては日本原水爆被害者団体協議会(略称は日本被団協)があるが、ここも同様の対立構造を抱えることになる。被団協にとって核廃絶を謳うことはできても原発問題に触れることは分裂を触発しかねないアキレス腱となったのである。(広島では完全に分裂してしまった)

　その状況を「フクシマ」が一変させた。被ばく国日本で再び多くの被曝者が出てしまったことにもはや口を閉ざして入られない現実として突きつけられての決断である。日本被団協は路線を転換することを表明した。

～以下、ニュースより～

**全原発の停止・廃炉を要求へ　日本被団協が方針転換関連**　2011年7月13日　asahi.com

広島、長崎の被爆者でつくる日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）は１３日、**すべての原発の操業を順次停止し、廃炉にするよう国に求める今年度の運動方針を正式決定**した。日本被団協は１９５６年の結成以来、原子力の平和利用を否定しない方針をとっており、大幅な転換になる。

記者会見した田中熙巳（てるみ）事務局長らによると、運動方針では「福島原発事故は原子力発電に依存するエネルギー政策の破綻（はたん）を示した」と指摘。**原発の増設計画を中止し、現存する原発については「年次計画を立てて操業停止・廃炉にするよう要求する」**とした。

被爆国になぜ原発？　問われる「だからこそ」の論理建設現場に到着した福島第一原発１号機の圧力容器。原爆投下から約２４年後のことだった＝１９６９年５月、福島県大熊町

　「原爆の被爆国はなぜ原発大国になったのか」・・・・広島と長崎で原爆を受けた人に原子力の研究者が多いそうだ。みな「平和利用で」「人が生きる道に使うんだ」ということで原子力に取り組んだとのこと。被爆国“だからこそ”の原発大国をという一見倒錯した論理が出現する背景とはなんだろう？　一つの分析を紹介する。

**「傷つけられた被爆者だからこそ、『貴方（あなた）たちの命を奪ったものが、実は、癌（がん）を治療するのに役立つのみならず、強大な生命力を与えるエネルギー源でもある』というスローガンは、ある種の『救い』のメッセージとして受けとめられた」　　　広島平和研究所の田中利幸さんは世界８月号**

　被爆者の絶望的な心理に巧みにつけこむ「原子力平和利用」の言葉・・・・・。アメリカが仕組んだ巧みな心理戦に抗することは当事者であるほどむずかしことだったと思う。未来を担う多くの子どもたちが犠牲になった今回のフクシマの教訓を生かすために、自らの呪縛から脱することを宣言した意味を政府と全ての国民は共有すべきだ。

　フクシマは政党や国家イデオロギーを超えた生命系全体の問題に発展した。立場を超える新たな思想・価値観の獲得を人類は迫られている。日本被団協の宣言が大きなうねりとなって世界に拡散することを願う。